

<新刊紹介>外間守善著(1)『南島文学論』(2) 『南島の神歌-おもろさうし-』(3)『南島の 抒情-琉歌-』

間宮, 厚司 / マミヤ, アツシ / MAMIYA, Atsushi

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

53

(開始ページ / Start Page)

62

(終了ページ / End Page)

63

(発行年 / Year)

1996-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019865>

外間守善著

- ① 『南島文学論』
- ② 『南島の神歌—おもろさうし—』
- ③ 『南島の抒情—琉歌—』

間宮 厚司

①は、著者が嘗々と開拓してきた四〇年間の研究の成果をまとめた大著で、その内容はいへん広範多岐にわたっている。そこで先ず、全体の構成について概観しておこう。

序 章 南島文学の全体像

第一章 呪言を伝える文学主体と南島の神々

第二章 歌謡論

第三章 オモロ論

第四章 琉歌論

第五章 組踊論

終 章 南島文学論

序章では、南島文学というものを、奄美・

沖繩・宮古・八重山の四つの諸島にまたがる地域で生まれた文学の総称であると定義し、それを古代文学と近代文学とに二分し、その内容を形態・発想の両面から分類し、それらを日本文学と関連させつつ位置づける。

第一章では、南島全域の神歌や呪言の全体像（呪言から叙事詩への史的変遷）を明らかにすることで、折口信夫の「文学発生論」の実証を試みる。次いで、沖繩の呪言「テイルクグチ（照る子口）の素性や南島に伝わるユングトウ（誦み言）」と呼ばれる呪言に関する考察が綿密になされ、さらに南島に現われる異形の神々、沖繩の祖先神アマミク、南島に現われるアラ神と日本列島のアラ神について斬新な意見を提示する。加えて、南島の神話・

伝説を紹介し、神々の原郷・ニールラスクに関しても視野の広い論を展開している。

第二章では、初めに南島歌謡の源流と系譜について述べ、その後で沖繩・奄美・宮古・八重山の各歌謡をそれぞれ形態別に分類し、その特質を様々な角度から探り、分析する。

第三章では、最初に『おもろさうし』概説を設け、オモロの語義や時代背景、その成立と内容、諸本などの基本的な事柄を解説し、冒頭のオモロの思想と構造（国王を守護する間得大君・おなり神信仰・神女の呪力など）を明快に説き、『おもろさうし』の世界観と神観念（アマミヤ・ニライ・オボツ）の問題を取り上げ、太陽崇拜と日子（テダコ）思想の成立過程をあとづける。一方で、オモロに見える抒情の芽ばえも指摘する。それから、『おもろさうし』の「又」記号の成立過程についても検討を加える。また、オモロの創世神話を構造的にとらえることで沖繩の原思想（複眼的な世界観）を読み取ろうとする。

第四章では、沖繩のウタが琉歌と呼ばれるようになった由来と琉歌の成立過程、琉歌の種類や歌人、琉歌の表記と読み方等々の概説に始まり、続いて、代表的な琉歌を一語一句丁寧に、そして鮮やかに解釈する。

第五章では、組踊とその源流、組踊の成立事情などの概説的な説明を先ず施した上で、「執心鐘入」と「銘苅子」の二作品の構造的な分析を通して、その劇性的特質を取り出し解説する。また、沖繩芸能史という観点から能と組踊との関わりについても言及する。

終章では、南島文学の研究の歴史が、田島利三郎に始まり、伊波普猷へと受け継がれていった経緯を詳述しながら、その先学の学問的価値を現在の眼で、冷静沈着に批評する。それに続く南島文学の発生と南島歌謡の変容についての仮説（呪言↓呪禱↓叙事↓抒情）は実に魅力的である。同時に、著者の方法論の根底にある折口信夫「まれびと論」を否定する谷川健一説を論理的に批判している。

「あとがき」で著者は次のように述べる。

終章の「南島文学論」は本書のいちばん
だいたいな章だと考えている。私の「南島
文学研究」のエッセンスは、ここに集約
されているといっても過言ではない。

六九〇頁から成るこの研究書は、著者の現時点での到達点であり、集大成である。が、著者の研究はこれで完結したわけではなく、

既に新たな一步を踏み出している。学問の歴史は、如何なる分野においても誤りの繰り返しの歴史といえるだろう。よって、訂正・修正される部分は、将来必ず出てくるものと思われるが、たとえそうであっても、本書は南島文学の研究を志す者が必ず読まねばならぬバイブルである。その意味で本書は永遠の光（輝き）を放ち続けるに違いない。

②③はともに文庫本で、一般の読者を念頭においた啓蒙的な入門書といえる。

②は、沖繩最古の歌謡集『おもろさうし』（全二巻・一五五四首）の中から、代表的なおモロを選んで鑑賞する。その際に、古代沖繩の歴史・言語・思想などが分かりやすく説明されているので、初心者でも十分に理解・味読することができる。特に第一章では、沖繩を愛する著者の思い出が時折顔をのぞかせる。なお、先に紹介した『南島文学論』の「第三章おモロ論」に収載できなかった内容（主におモロの語句解釈）が本書で補える。

③は、一語一句を決しておろそかにしない
正確な解釈と、作者（様々な階層の人々の
生きた時代背景を作品に投影させる手法で、
琉歌の心を鮮明によみがえらせる。そして、

カタカナで琉歌の読み方を記してあるので、
声に出して鑑賞することも可能。また、便利
な「琉歌索引」を最後に添える。なお、本書
も②と同様、『南島文学論』の「第四章琉歌論」
に収載されていない内容（例えば琉歌と琉球
古典舞踊など）が盛り込まれている。

（まみや あつし・文学部助教授）

▽①一九九五年 角川書店・一二〇〇〇円

▽②一九九四年 中公文庫・七八〇円

▽③一九九五年 中公文庫・九八〇円

△著者〳元文学部教授